

第15講 文化史が直面する問題

事前レポート課題：今、文化史が直面している問題とは何か。

文化史の可能性

「大きな物語（民族史）」を失った歴史学からの期待

「新しい文化史」の登場

事実ではなく言説を歴史の基盤とする

歴史学が陥っている閉塞状況を打破するものとして熱い期待が寄せられている

歴史学では「遊び」は学問研究の対象とはならない。しかし文化史では「遊び」は文化そのものであり、研究の対象となる。何故古代ギリシアでは民会が各都市にあるのか、その理由は歴史学では明らかにならない。民会の存在は所与の前提とされているからである。しかし文化史では民会の存在は古代ギリシアの政治文化として論じることが可能となる。

近代の産物としての民族と民族主義

生物学的起源：太古の昔から血縁集団として存在

民族固有の文化を形成

そのような民族を歴史的には証明できない

民族及び民族主義は近代の言説に過ぎない

移動・モザイク状の居住・言語の形成

ローマ市民権の付与・ローマ風の教育の普及・ローマ人帰属意識の形成・言葉の違いはローマ人意識を分断させず（ラテン語圏とギリシア語圏）→ローマ人対ゲルマン人・ペルシア人という意識

フン人

アッチラのもとに結集したのはフン人だけでなく東ゴート人や西ゴート人、さらにはローマ人もその中に含まれていた。

フランス人

絶対主義時代には領主層としてのゲルマン人、庶民層としてのローマ人と意識

されていた。

共和国によるケルトの強調
ウェルキングゲトリクスの英雄化
外国勢力に対する抵抗のシンボル

民族や民族主義は近代文化の産物に過ぎない

文化史には「大きな物語（国民史）」を「オオキな物語（文化史）」として語っていくことの可能性がある

歴史をマイクロ・コスモスに落としこんでいくことがない（社会史の落とし穴を回避できる）

言語論的転回からの挑戦

言葉は現実世界の中から形成されるのではなく、逆に現実世界が言葉によって作られていく。

歴史学が基礎とするテキストの信憑性への疑問。

トゥキュディデスもクテシアスもテキストとしては同じ欠陥を持つ。

一次資料も二次資料も、公文書も昔話も同列。

科学的歴史叙述は不可能になる。

歴史学の立場

多くの歴史家は哲学的認識論には関心を持たない。

毎年大量の論文が生産されている。

完全な史料はこれまでなく、史料が完璧に揃っているということもなかった。

史料は隙間だらけだし、現実世界の断片を一方の視点から記録しているに過ぎなかった。

テキストには意識的・無意識的虚偽は数多く含まれている。テキストに虚偽が含まれているからと言って、そのことで歴史家の探求を断念させることはない。

その欠点を埋めるために歴史学は文献学的手法による史料批判を行なって来たし、文献解釈学を利用してきた。もちろん、歴史家が依存するテキストが不完全であると

いう前提で。

歴史の全体像を描けなくなっている。

ますます小さな世界に閉じこもっている。

文化史学の立場

歴史学は言説としての文化史に将来性を見出そうとしている。

それは歴史の全体像を文化史によって描けるようになるのではないかという期待。

しかし、文化史は言説の場に留まるのではない。文化史は何よりも政治史や経済史、さらには社会史が等閑視していた文化史的事実の発掘と文化史的事実に基づいた文化史の再構成を目的としている。

従って、文化史を言説ないしは言説の場に矮小化してはならない。

また、社会史が批判する文献解釈学的方法を文化史は排除するものではない。確かに伝統的な歴史学が基づいてきた文献解釈学的方法は何よりも主観的であるし、曖昧であるという一面を持っている。しかしそれはテキストの不完全さ、曖昧さに依拠している。文字テキストの不完全さ曖昧さも問題であるが、美術的テキストをも史料として活用するがゆえに解釈学的方法を排除することができないのである。

データの統計的処理を排除するものではないし、データの処理のためにモデル構築を否定するものでもない。文化史は非文字テキストを積極的の活用する学問領域であるし、考古学や理化学的データ

このような意味において文化史は複合的な方法論を用いざるを得ない。この意味においても文化史は総合的な学問領域なのである。